

# Rio

リオ  
豊田市矢作川研究所 月報

## CONTENTS

- 矢作川観察ノート (15)  
矢作川の大洪水とシラハエ
- 平戸橋周辺の自然観察 (7)
- 昭和48～49年撮影  
矢作川上流～下流の写真
- 今月の一枚
- 研究所の調査風景

11  
2001 November  
No.43

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/> yahagi/index.html e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

\*Rioはホームページ上でもご覧になれます

## 矢作川観察ノート(15)

# 矢作川の大洪水とシラハエ

新見幾男

初夏の矢作川でアユ釣りをしている、今年はシラハエ(オイカワ)の稚魚が多いと思った。緩い流れの岸辺に立ち込み、沖にむかって竿をさしていると、足もとに稚魚の群れが集まって来る。魚体の小さい頃は魚種の区別がむづかしい。ムツ(カワムツ)もいたかも知れない。とにかく1～2cmの小魚が多かった。

アユの友釣りの季節が終わり、もう10月だ。あの

小魚の群れのことなどは忘れていたが、釣り仲間の友人の一人が「今年の寒バエ釣りは良さそうだ」という。冬になって川の水温が下がると、シラハエは瀬からトロ場に移り、大きな群れを作って、集団生活をする。それを釣るのが寒バエ釣りだ。シラハエは今はまだ集団になっていない

が、友人がいうには、今年は川に体長4～5cmのシラハエが多いのだそうだ。それを見て、12～2月の寒バエ釣りの成績を予想したのである。

私が初夏に体長1～2cmのシラハエの稚魚の群れを見たのは、河口から40km地点の豊田都心付近や、それより3kmほど上流の豊田市越戸町付近だ。秋になった今、友人が体長4～5cmのシラハエがたくさん見え

るといっているのは、もう少し上流の、河口から50km地点付近の豊田市西広瀬町あたりらしい。河川監視員の話だと、更に上流の70km地点付近の東加茂郡旭町小渡あたりでも、シラハエは多いという。

私と友人の会話の結論は、こういうことだ。私が初夏に見た体長1～2cmのシラハエと、友人が今見ている4～5cmのシラハエは、多分同じ時期(5～6月頃か)に産まれたもの

のだろう。そうだとすると、今年のシラハエの産卵は調子が良かったことになる。今年の矢作川は産卵・孵化の条件が揃っていたということだろう。

私と友人の会話は、こう進んだ。昨年の矢作川には、東海豪雨による大洪水があった。それで川底の固い構

造が破壊され、矢作川のあちらこちらに、砂利や小石まじりの軟らかな構造の川底が出現し、そこがシラハエたちに好適な産卵場になったのではないか。魚たちのためには、川はしばしば荒れた方がいい。

私たちが思うに、今から30年程前、総貯水量8000万トンの矢作ダムが78km地点に出来て以来、それより下流の矢作川には洪水が少なくなった。源流域の山々



豊田市越戸町「お釣土場」の寒バエ釣り(1997.1.19)

から流れ出る砂利や大石、小石は矢作ダムの湖底に沈み、そこから下流へは流れて来なくなった。支流からわずかに流入して来る砂利も、ごく最近まで、矢作ダム下流にある幾つもの発電用のダム湖内で徹底的に採取されつくされて来た。

河口から40~60km地点あたりの矢作川中流域では、川底の砂利や小石は下流へ流れ去る一方で、上流からの供給はほとんどなくなった。まず発電ダムの直下流で局地的に川底が固くなり、それが次第に中流域全体に広がってしまった。土木工学の人たちがいう「アーマー・コート」という現象が、矢作川中流域の川底では普通のことになっていた。それが昨年の大洪水で破壊され、シラハエたちの産卵場が増えたのだろう。大洪水の際に矢作ダムが放出した砂は粒子がきわめて細かいので、その被害がやがて目立ってくるだろうが、それはさて置き、大洪水のおかげで川底が軟らかくなった。アユ釣りで川の中を歩いていて、そのことを今年足裏で感じた。

何年も前の5月のことだったと思うが、発電用の越戸ダム直下流の44km地点付近（古川水辺公園）で、漁場整備事業の一環として、すっかりアーマー・コー

ト化した川底を局地的に天地がえしたことがある。砂利や小石のある川底が姿を現わし、そこにどっとウグイの群れが集まって来て、産卵行動を見せてくれた。砂利や小石は1年で流れ去ってしまったが、あれは私たちがすっかり忘れていた感動的な光景だった。昨年の大洪水の時には、あの大濁流の下で、超大規模な天地がえしが自然のうちに進行していたのだろう。

もっと前の年の5月のゴールデン・ウィークのことだったと思うが、別の友人と2人で布製のカヌーに乗り、44km地点から河口へ下ったことがある。今でも大しては変わっていないが、30km地点付近から下流は砂利や小石ばかりの砂河川だった。そんな場所のいたるところで、布製の船底に異常を感じた。川底の石にぶつかっているのとは違う、軟らかな感触だった。ほどなく私たちはウグイの産卵場の上を通過しているのを知った。巨大な魚体が恋ぐるいするのを臀部に感じながら、私たちはカヌーの旅を続けた。あの豊穡な体感の記憶は今もはっきりしている。

（にいみ いくお、矢作川漁業協同組合専務理事  
・豊田市矢作川研究所事務局長）

## 平戸橋周辺の自然観察(7)

山原勇雄

9月も中葉を過ぎ彼岸の頃になると、田んぼの畦や川堤に秋がスタートした事を告げるヒガンバナを見る事が出来ます。今年は友人によると例年より2週間程早い開花だったようです。私は9月中旬に矢作川右岸の道にて確認しましたが最盛期を過ぎた感がありました。10月に入って最初の休日には、早朝6時過ぎより平戸橋上流右岸の水辺を観察しました。タカサブロウ、ヒメクグ、クズなどの花や、メリケンカルカヤ、オガルカヤ、ススキなどのイネ科

の植物が秋を演出していました。水際を離れた乾燥地ではチカラシバが立派な穂をつけ、ワラビは大きくなった葉を赤みがかった茶色にしています。キンミズヒキは楕円形のトゲのある実を付け、イノコズチはくつつき虫を穂先に用意させ茎の中央部に虫コブを大きくしています。盛夏には人目をひく紅紫色の花を付けたコマツナギもこの時季では円筒形のさを黒くして来年を待っている様に見えました。オナモミは、1ヶ月前には確認出来なかったトゲのある緑の実を付けています。

秋の朝のすがすがしい冷気の中、いつも姿形を変えながら私たちの心をなごませる自然に感謝したいと思うのでした。

（やまはら いさお、平戸橋自然観察『草だらけの会』）



チカラシバ



ヒガンバナ



イノコズチ



昭和48～49年撮影

## 矢作川上流～下流の写真

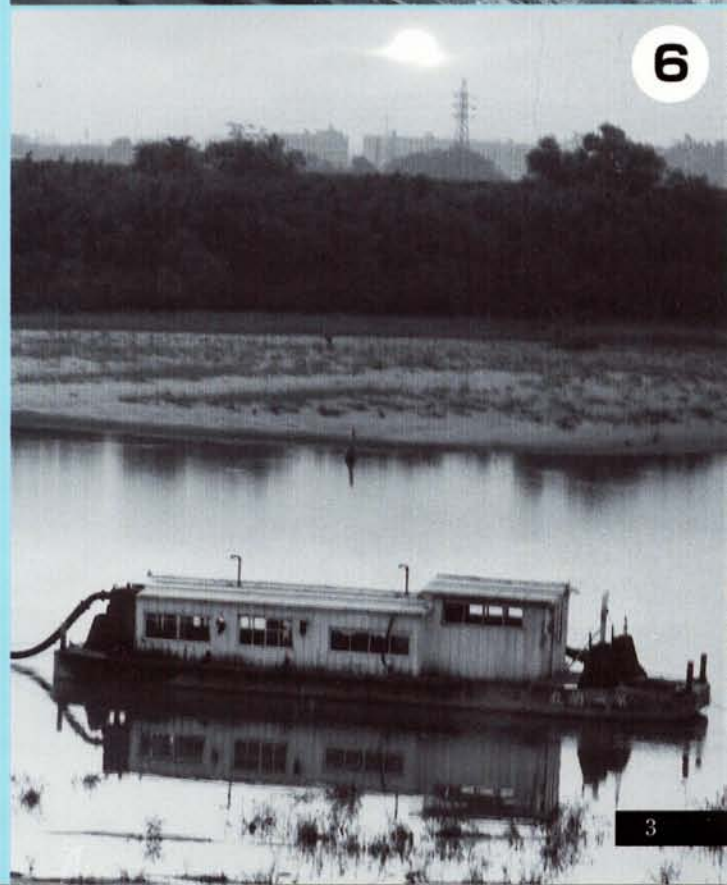
小川 都

昭和49年12月10日の中日新聞に、「矢作川の源流～河口まで主な支流も残らずさかのぼり撮影したフィルムは一万五千枚にも達した」との記事を見つけました。同記事によると中日写真協会25周年を記念しての活動とのこと。今から30年前の矢作川の写真はその量・質ともに貴重な資料であることは間違いありません。早速、写真をこの目で確かめたいと中日写真協会に問い合わせ、当時岡崎支部長をしていただいた鶴田国次さんを紹介していただきました。

後日、鶴田さんのお宅にお邪魔して伺った話によると、昭和48年6月から49年8月の間の毎週日曜日に朝早くから岡崎支局前に集合し、地図を見たり、時には地元の方に案内してもらうなどして、矢作川の美しさを伝えるべくいろいろなポイントを撮影し続けたそうです。今回はその中から何枚かを取り上げました。鶴田さんのお話と当時の撮影メモをもとに、撮影日と撮影ポイントを以下に記します。

尚、鶴田さんが撮影された写真とネガ（16本、350カット）は研究所に寄贈していただくことになりました。この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

（おがわ みやこ、豊田市矢作川研究所）



1 撮影ポイントを地図を見ながら打合せ。「支局が開く前なので玄関前」と鶴田さん。

2 昭和48年6月10日 茶白山を分け入り、沢を見つける。

3 昭和48年7月15日 「柳川上流（大川入山）」

4 昭和48年8月26日 「大川橋」

5 昭和48年11月25日 「矢作川河口」

6 昭和48年9月25日 「日名橋附近」

写っているのは「ポンプ舟」。砂利採取の風景（注 小川）

# 今月の一枚



豊田大橋付近にて  
「ニゴイの学校？」

(一九九九年十月二十六日)

田中 蕃  
撮影

## 研究所の 調査風景

カワシオグサは海の海藻  
と同様の香りがしました。  
(内田)



▼玄関前にてカワシオグサ乾燥中

9月28日(金)

右の写真は矢作川の川底の石に生えているカワシオグサを天日で干しているところです。カワシオグサが水生生物の餌資源としてどの程度の栄養素を含んでいるかを分析するための乾燥試料を作っています。

川から採取してきたカワシオグサはまず、水できれいに洗い砂利を落とします。さらにピンセットでトビケラやユスリカなどの水生昆虫を取り除き、ザルに広げます。乾燥した



10月15日(月)

今年も9/25より流下仔アユ調査が始まりました。河口より11km

湖つた地点で夜間の採集調査を行っています。ネットを23、2、5時に6分ずつ3回水中に固定しました。採取したサンプルの中には、体長約6mmの流下仔アユが800尾ほど含まれていました。これまでにない流下数で、今後の伸びを期待したいです。仔アユの流下は11月にピークを迎えます。(山本)

### 編集後記

10月は研究所員がそれぞれの分野の学会や研究会への参加・発表のために各地を飛び回り、あっという間にすぎた一ヶ月でした。これが学問の世界における「収穫の秋」の忙しさというものなのでしょうか？

さて、今月号には30年前の矢作川の姿を紹介しました。皆さんのお宅にも昔の矢作川の写真などありましたら研究所までご一報下さるようよろしくお願いします。(小)

ご意見・ご感想をお寄せください